

## 学校・部活動における重大事故・事件から学ぶ研修会

【第1回】 10月18日（金） 18時～20時半（世田谷・記念講堂）  
テーマ：熱中症による死亡事故をなくすための研修会

【第2回】 11月15日（金） 18時～20時半（世田谷・記念講堂）  
コンタクト・スポーツでの重大事故から学ぶ研修会

【第3回】 12月13日（金） 18時～20時半（世田谷・記念講堂）  
心臓性突然死をなくすための研修会

### 【第1回】 熱中症による死亡事故をなくすための 研修会

○ 工藤英士さん・奈美さん（工藤剣太君のご両親）

○ 国本考太さんのご両親

救命救急講座（熱中症編）：鈴木健介先生（保険医療学部准教授・救急救命士）

#### 《概要》

#### 【講演 1】

当時高校2年生であった工藤剣太君は、夏休み中の部活動で顧問のしごきにあい、熱中症を発症したが、顧問は打ち込みの続行を強要。さらに意識障害で倒れた剣太君に顧問が馬乗りになり、往復ビンタをするなどの暴行を受け、救急搬送が遅れたことで、剣太君は熱射病による多臓器不全で亡くなった。

#### 【講演 2】

結節性硬化症の難病を持つ24歳の国本考太さんは、水泳教室に参加中、水温32.7℃、室温36℃の過酷な環境下での厳しい練習によって熱中症を発症し、死亡した。考太さんの通う水泳教室は障がい者を対象にしていたが、スパルタ指導や介護給付費の不正受給など、福祉とはほど遠い実態があった。

### 工藤さんご夫妻の講演



講演ではまず、剣道有段者でもある剣太君の父親の英士さんがマイクをとった。

「大分県竹田市から参りました。うちの事件は2001年、8月22日に起こりました。まず、事件の起きる前、剣道部は8月10日から13日まで合同合宿をしていました。その最中に、その休みの最中に、合同合宿だったんですけど、他校の生徒がインフルエンザを発症したということなんです。そのため合宿明けに3日間の休みがあったのですが、さらに4日間、練習ができませんでした。合計1週間、練習をしていません。その間に顧問からは、『素振りだけやっつけろ』ということ言われました。

そして、休み明けの8月21日、子どもたちだけの練習が始まりました。その時の顧問の指示が『足が動かなくなるまでやれ』というものでした。」

1週間の休み明けの練習初日。当然、生徒たちは感覚を取り戻すために、軽めの練習から始めるべきである。しかし顧問は、その初日の練習で一切手を抜かないように、キャプテンである剣太君に厳命したのである。

「それでその日の練習が終わって、剣太が顧問のところに報告に行くと、顧問から『お前、ここまでどうやって来たんじゃ。歩いて来よるじゃないか。明日の練習は覚えちよけよ』ということをして、息子は言われたそうです。」

そして翌日である8月21日こそが、その日となった。練習は、朝の9時頃から練習を開始された。最初の1時間は防具を着けずに行ったが、過酷な暑さの中、部員たちはすでに汗だくであった。2～30分間の休憩に入った時、生徒たちはジャグに群がったものの、「飲み過ぎたら体の動きが鈍くなる。鈍くなったら、また顧問から叱られる」ということで、たった2、3杯しか飲まなかった。

そして練習が再開され、面を付けての打ち込み稽古となった。一対一の打ち込み、そして3人元立ちでの打ち込み。その時、顧問は剣太君の「動きが悪い」として集合を掛け、自分が座っていたパイプ椅子を、集合しようとしている剣太君に投げつけた。剣太君はそれを避けることができたが、話が終わった時、顧問は剣太君の面だれを持ち上げ、剥き出しになった喉を叩いた。その衝撃で面が外れたため、剣太君は隅に行って正座して、面を付け直そうとした。すると顧問は、「お前、そうやって休憩しちよるんやろ!」と、今度は手を出して突き飛ばした。

やがて元立ちが2人になり、剣太君はふらつき始めた。1人の部員がトイレに吐きに行き、もう1人の部員は倒れ込み、なかなか起き上がれなくなっていた。顧問は、体調を崩した部員らを竹刀で打つなどし、なおも練習を続けさせた。

そして、元立ちが1人になり、剣太君、トイレで吐いた子、倒れた子の3人、すなわち、明らかに熱中症を発症している生徒が「合格するまで」打ち込みをやり続けさせられた。剣太君以外の2人は、何とか1回か2回で合格とされ、放免された。しかし剣太君に対しては、たとえ部員たちが「合格」と言っても、顧問が「今のどこがよかった?」と言って否定された。そのため何度も何度もやり直し、そして剣太君はとうとう倒れてしまった。

「手をついて前に倒れたので、子どもたちがコップに水を汲んできて、面の上から水をかけ、声をかけました。二杯目をかけた時にやっと反応したのだけでも、部員

たちがみんなで『立て、立て』と言っても、立てない。それでも顧問の『立て!』の一言で、起き上がるんですよ。いかに顧問が恐いか。それで起き上がり、どこを見ているか分からない様子でふらふらしながら、一度壁の方に行って、また向きを変えて、また違う壁のところに行く。その時、自分で面をはぎ取りました。面を付けてない状態でふらふら、ふらふら歩いて、壁があるんだけど、壁に全く気付かないで、そのまま壁にぶち当たります。そして額を擦って、そのまま座り込むようにして、『アーッ!』と言いながら、仰向けに倒れ込む。そして倒れた後、普通はすぐに救急車を呼びますよね。もうその時点で遅いくらいなんですけど、その時に顧問がとった行動は、胸ぐらをつかんで、片足は胴の上に載せて、剣太を引き起こして、今度は往復ビンタですよ。バーン、バーンと10発程度。見ていた子どもたちは、(剣太が)額を怪我していたんで、血が吹っ飛ぶような勢いで殴っていたそうです。とても気づけで、具合の悪い生徒の意識を戻すような叩き方ではなかった、というようなことを言っていました。」

その後、ようやく救急車が呼ばれた。顧問から、英士さんの携帯電話に連絡があった。

「『剣太と今から病院に向かいます。今日はそんなにきつい練習はしていません』というのが第一報でした。剣太のすぐ下の1年生に弟がいて、一緒に稽古していたので、私はまず学校に弟を迎えに行きました。すると、なかなか弟が車に乗ってきません。『風音、急げ。剣太が病院に行ったんだから。急いで車に乗れ』って言ったら、『お父さん、足がつって、動きたくても歩けないんだ』。もう、両足ついています、これも、熱中症の症状です。剣太よりはるかに軽い練習をしていた弟も、そうやって熱中症を発症していました。そして病院に着いて、なかなか弟は車から動こうとしない。『まだ悪いんか』『お父さん、まだ歩ききらんけん、先に行っていよいよ』って言うので、先に病院に入りました。

病院に入ると、処置室の前に顧問がいました。ここでも同じです、顧問が言った言葉は、『今日はそんなにきつい練習はしていません』。

それで私は処置室の中に入りました。その時の剣太の状況は、処置室のベッドの上で、暴れていました。『ウオー——!』声を出しながらです。寝ていたと思えば、起き上がる。また看護師さんが押さえつける。それでもまだ、『ウオー——!』という雄たけびを上げながら、また起き上がる。そして看護師さんから『お父さん来てください。一緒に押さえて下さい。処置が

できないから』。それで私は剣太の胸を押して、ずーっと押さえ続けていた。で、その間に鎮静剤が二本打たれました。二本打って、やっと大人しくになりました。剣太を最初に見た時に、目は開いているんだけど、どこを見ているか分からないんです。私が『剣太、剣太』と声を掛けても、反応がなかった。もう正直、この時は『ダメかな』という気はしました。」

「厳しい稽古と暴力的な稽古は、まったく違いますよ。皆さん方がこれから、指導を行って、子どもたちに教えていく中で、何が大事か。何のために剣道をやっているのか。剣道の理念の中に『剣道とは、人間形成の道である』とありますよね。練習することによって、精神を鍛えて、人間を作るんだ、というのが剣道の理念のはずです。指導者として、自分の名を上げる、学校の名を上げる、そういう指導をしているかもしれない。また子どもも、父兄も、『強くなってもらいたい』『勝ってもらいたい』。これは当たり前ですよ。しかし指導者は、そんなことより、子どもの人命が大事です。子どもの身体が第一です。

皆さん方は、体育大学に進んだ学生さんたちですから、色んな競技で、超一流の選手だと思いますが、そうでない子もいる。好きでやっている子もいる。是非子どもさんの将来を考えた指導を行ってもらいたいと思います。」



ここで、マイクは奈美さんに渡された。奈美さんは、英士さんの話を少しずつ補足し、「息子の司法解剖」という大変辛い経験についてひとしきりお話をされた後で、こう結んだ。

「テレビなんかでも『熱中症で1人死亡』とか、テロップで出てきますが、実際は、『こんな死に方するの?』っていうくらい、壮絶です。ですから、『たかが熱中症』

ではないんです。そして熱中症というのは、早期に発見できれば、私は100%完治するものだと思っています。ふらつく状態で病院の方に搬送したりとか、ちゃんと水分、塩分をとらせて休憩させるとか、そういうことを怠っていなければ、うちの息子も生きていたんじゃないかな、って思います。

『もう無理です』って発声できた時。さっきの話でも分かると思いますが、すごく怖い顧問です。その顧問に、『もう無理です』っていう言葉を、どれだけの勇気をもって言ったのか。その状態で、『そんなだったら、ちょっと休んでろ』とか、『そんな悪いんなら病院に行くか?』って、一言顧問が言ってくれていれば、息子は生きていて、今27歳になっています。だから本当に残念でならないし、絶対に助かるんですね。熱中症は早期に発見できれば、きっと助かります。それを皆さんに伝えることができたということは、本当に嬉しいことです。」

「こうして私たち、南部先生から、『こういうことをやろうと思うんだけど』って最初に言われた時に、嬉しくて、『やります!』って、私、手を挙げました。これから日本のスポーツ界を担う皆さんたちに、ぜひお話をしたかったんです。それで、何度も何度も日体大に、私たちは足を運ばせてもらいました。テレビで『日本体育大学』って出ると、もう無条件に、『お父さん、日体大が出たよ!』って、もう家族総出で応援するくらい、すごく愛情を持っています。これだけ頑張っている皆さんですから、本当にいい指導者になると思うんですね。だから『こういうことが起きた、こういうことがあった』ということを、常に頭の隅に置いて頂いて、『これ以上やったら、この子はダメになるかもしれない』『これ以上やっても無理かもしれない』『危険かもしれない』っていう時には、『ストップする勇気』というのも必要だと思います。」

## 参加者の感想

・ 私自身も剣道を続けて来て、今回のお話を聞いて本当に言葉を失いました。剣道の辛さも分かるし、監督の言うことを聞かないといけないことも分かります。しかし、ここまでひどい経験はありませんし、想像もつきませんでした。私は、この先も剣道を続けていくつもりですが、指導者という立場になっても、そうでなくても、勝ち負けにこだわるのではなく、人の命を最優先に守ることができるような人になっていきたいと思いました。

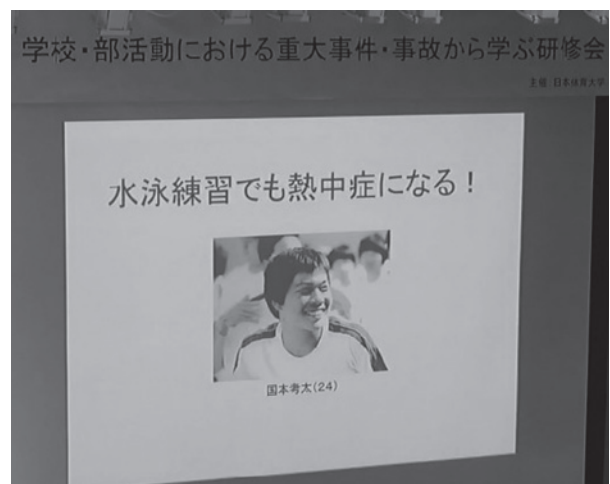


- ・自分自身同じ剣道をしていて、あんなにもひどい状況になるまで練習しても強くなるとは思わないし、指導力がないなと思った。今後、自分が教育現場に立つことがあれば、それぞれの生徒に合った練習を考えたいと思う。そして、熱中症などになった場合の対処法の知識をしっかりと身につけたい。
- ・工藤さんご夫妻の話聞くのは二度目でした。熱中症は本当に残酷だと思いました。私は、そのような先生に出会ったことがないので、そんな先生がいるという、驚きと衝撃が隠せません。自分自身、幼い子どもたちの指導に少し携わることがあるので、どこまでが指導でどこまでが暴力になってしまうのか、よく考えて、これからの剣道人生を歩んでいきたいと思います。いつも、わざわざ遠いところからお話に来て下さり、ありがとうございます。
- ・今回のお話を聞いていて、すごく悲しい事件だと思いました。私も剣道をやっている身としては、顧問の先生はすごくやりすぎだと感じました。剣道は勝つことも大切なかもしれませんが相手のことを考えるというのとても大切だと私は考えています。なので、この顧問にはその気持ち足りなかったのではないかと思います。このような事件があった、どういう経緯でこうなったのかを話すと言うことはとても辛いことだと思いますが、私たちのような者にお話をして下さい、ありがとうございました。これからの部活や運動の際には気をつけたいと思います。
- ・自分は、将来高校の体育教師を目指しています。この事件については、ニュースで知っていました。ですが、ここまでの詳しいことは知りませんでした。今日のお話は、本当に僕の人生にとって一つの大きな決心を与えて下さるものでした。また、命の重さ、尊さ、いつ、どこでも死のリスクがあることが分かりました。自分が教師になったときには、こういった事件を起こすことなく、また起こしそうな教師がいたら、全身全霊で止めようと思います。自分が職を失うようなことになっても止めます。一人の命を預かる責任を持つ教師になり、生活できたらと思います。本日は、本当に有り難うございました。
- ・剣太さんは熱中症によって命を落とされたけれど、実質的には顧問の行き過ぎた行為によって命を奪わ

れるという、絶対にあってはならないことが起こってしまったということに衝撃を受け、胸が痛みました。部活をやっている身としては、いくら強くなりたい、上手くなりたいと思っても、命より大事なものは無いということを肝に銘じたいと思いました。

- ・自分も中学の時、練習が厳しすぎて毎日辞めたいと思っていました。その中で得られたものもありましたが、死と隣り合わせの状況で、危険なことでもあります。生きていなければ何も出来ないし、こんな指導者にならないようにしたいです。
- ・剣太さんは事件当時、ものすごく辛かったと思いました。事件発生は10年前のことではありますが、今でも武道の現場ではこういった現状が残っていて、特に高校などでは多く見られます。私の高校も30年以上の歴史を持つ東京の強豪で、監督の考え方は古いものでした。根性論は未だ無くなっておらず、それにより効率の悪い練習を行う学校は少なくありません。教育者・指導者が皆、剣太さんの事件を知り、考え方を変わってくれることを切に願います。私が教育者になるときは、この事件を忘れず、生徒に寄り添いたいです。

## 国本考太さんのご両親の講演



「こんばんは。大阪府から参りました、国本考太の母と、父です。この時間をうまく使えるか、自信がないですけども、一生懸命話します。よろしくお願いします。」

国本考太さんは元気に生まれてきたが、生後9か月の時にけいれんを起こしたため、病院で検査したところ「結節性硬化症」という病名が告げられた。「発達が遅れる、顔に目立つできものができる、それからけい

れんの薬をずっと飲んで下さい」と告げられた母は、「正直、この先どうなるんだろう」と不安になったというが、母の不安をよそに考太さんは入院5日目にはすっかり元気を取り戻し、点滴をつけていないもう片方の手でベッドの柵を持ち、ピョンピョンと跳ね、ニコニコと笑っていたという。

『『無病息災』という言葉がありますけれども、考太は『一病息災』そのものでした』。

中学校3年生の時から、1、2か月に一度くらい、てんかんの「複雑部分発作」、つまり、「2、3秒ほど気が抜けたように停止して、3分ほどで回復する」というタイプの発作を起こすようになったが、親でなければ発作であると感じにくい程度のもので、もちろん命に関わるようなものではなく、日常生活はもちろん、スポーツにも何らの制限もされていなかった。そのため考太さんは、気の赴くままに多くのスポーツに打ち込んでいた。

「ここで、考太が色んなスポーツをやってきた、その動画を用意してきていますので、観て頂きたいと思います。」

幼い考太さんが、体操教室で跳び箱に挑戦している様子、少し大きくなった考太さんが披露した華麗なロンダードにタンプリング。さらに成長した考太さんがバーベルを上げ、バスケットボールでは美しいドリブルをし、スキー場では鮮やかなシュプールを描きながら斜面を滑り降り、プールでは華麗なフォームで勢いよく水しぶきを上げている。

事件が起こったのは平成25年8月14日、考太さんが24歳の時のことで、この夏は「観測史上最高の暑さ」と言われ、8月12日には四万十市で国内最高の41.0℃を観測、連日各地で40℃を超える高温が記録され、35℃以上の猛暑日が続き、気象庁は「異常天候早期警戒情報」や「高温注意情報」を発表し、連日新聞やテレビは「熱中症に注意」と呼びかけていた。

事故当日、考太さんが通っていた水泳教室の練習が、東大阪アリーナプールで行われた。事故当時のプールは、水温32.7℃、室温36℃という環境であったが、水温を下げるような装置はついていなかった。このような過酷な暑熱環境の中、午後6時から始まった練習は、アップを200m泳いだ後、100m×10本をクロールで1セット、次にバタフライで、2分のインターバルで泳ぐようコーチから言われた。そして17本泳いだところで、コーチが「遅い。フォーム修正」と言って、考太さんともう一人の女の子に対して、むっとするような暑さのプールサイドに上がって「シャドーストローク」を行うよう指示した。

考太さんと一緒に上げられた女の子は、翌日から世界大会に行くことになっていた。そのためコーチは、その子の仕上げ練習が第1目的で、考太さんのことはまったく見ていなかった。単にその子と「種目が一緒」ということで、考太さんも同じく一緒に泳ぎ、一緒にシャドーストロークを指示されたものと思われた。

「ただでさえ休憩なしで、5分以上のシャドーストロークで、私はプールサイドにいたんですけれども、本当に、噴き出した汗が体中に、玉のように付いていたんです。」

そしてコーチはふいに二人に、タイムトライアルを全力で泳ぐよう、命じた。そこで考太さんに、異常な行動が起きた。たいていはコーチに言われたことにすぐに従う考太さんが、プールに向かわずにウォータークーラーのところに向かい、一口だけ水を飲み、すでに泳ぎ始めていた女の子から後れをとって「ストン」と足からプールに入り、指示されたバタフライではなく、クロールで泳ぎ始め100mで止まるはずが止まらずクイックターンをしていったのだ。この考太さんの異常な様子に気づいた練習生が考太さんの足をつかんで止めようとしたが、なおも泳ぎ続けようとしていた。『『おかしい』』ということでプールサイドに上げたところ、肘は曲げて、目は瞑った形で、手を震わせてけいれんをしたんです。私たちは何が起こっているか分からなかったで、とにかく『大丈夫？ 大丈夫？』って、介抱していました」。

その後、救急車が呼ばれ、考太さんは病院に搬送されたが、処置室の中でけいれんが止まり、「これから治療」という時に、考太さんの心臓が止まってしまった。

『『心臓マッサージをしています、厳しい状況です』』と言われた時、『まさかこんな元気な、明るい、家族の中心で、筋肉モリモリで、本当に太陽みたいな子が…』と思ったのですが、亡くなってしまいました。』

病院から警察に通告がなされ、事情聴取を受けている時に、「体温が41.9℃もあった」と知り、両親は驚いた。警察から「遺族が望めば司法解剖をすることができけど、どうする？」と言われたが、かわいそうで仕方がなくて、解剖という選択はできなかった。

お通夜の際、別のコーチが「好きな水泳の最中で、考太は本望やったろう」と、口にした。この言葉は、両親を打ちのめした。そして徐々に、障がい者を対象とした水泳教室であるのに、コーチが練習生に対して「制限タイムが切れなかったら」、「遅刻したら」「ネガティブな言葉を口にしたら」、罰金として500円を徴収していることを知り、夫妻には不信感が募った。考太さんも、

自分が働いてもらった大切なお給料から、この罰金を12回も支払われていたということを、死後に知った。

「どうして子どもが嫌がることをするのか。子どもたちを従わせるために、こういう罰金制度を決めて、そして平気で追い込む。そういうことをしていた人を、私たちは許せませんでした。」

そこで「この水泳教室はおかしい」と考えて調べると、水泳教室と読み方が同じ名前の介護事業所を運営していることが分かった。そして、考太さんを含めた練習生の水泳教室での月謝とは別に、ありもしない介護サービスを行ったことにして、福祉のお金を不正受給していたことが分かったのである。国本さんは、「今まで子どもがお世話になっていたから」と、一瞬躊躇したものの、「やはり、このままではいけない」と、責任を追及することを決断した。

「不正受給に関しては、大阪市役所の方に情報公開請求をして、そして告発をしました。命に関しては、やはり損害賠償請求訴訟しか、責任の所在を明らかにすることは難しいので、そうしました。」

それから裁判となったが、裁判でコーチは、自らはプールに入らずに生徒たちを指導していながら、「水温、室温表示を見ていない」、「自分は暑いとは思わなかった」、「自分は、(プールに入らなくても)飛んでくる水しぶきでプールの水温は分かる」、「熱中症ではなく、てんかん発作だ」、「練習メニューに問題はない」、「練習メニューを軽減しなかった」、「水分補給は制限していない」、「休憩はあった」、「自分が上級指導員の資格を取った時、熱中症について習っていない」などと、信じがたい言い逃れに終始した。

日本水泳連盟の『水泳指導教本』には、屋外プールの場合ではあるが、水泳に適した環境について、「水温プラス気温の考え方」が示されている。この数字が65℃以上となった場合、熱中症の恐れがあり、不適だとするものだ。事故当時の東大阪アリーナプールは水温32.7℃、室温36℃。つまり両温度の和は68.7℃となり、不適とされる水準をゆうに超えていた。

そして、本件のコーチは、事故当時の練習状況について「休憩はある」と言っていたものの、実際には2分間というインターバルの中で、「一生懸命泳いで、戻ってきたら30秒くらいは休憩できる」というものであった。

「ギリギリのタイム設定をしておきながら、それでしんどいとか、そういうことを言わせない。で、遅かったりすると、アップテンポを強要する。そのように、競泳に不適な環境であっても一生懸命な泳ぎを求

め、遅いとさらにキツイ練習をさせることは、絶対に間違っていたと思います」。

それから国本さんは、てんかんについても理解を求めた。てんかん発作が起きた場合、すぐに救急車を呼ぶ必要はなく、多くの発作は数分で自然に収まるので、周囲の人は、自分の唾液とかで喉が詰まったりするようなことがないように、体が楽になる体勢を取ってあげたり、衣服を緩めてあげたり、危なくないように見守る、といった対応を取ることが大事だと強調する。

最後に、考太さんのような特性を持った子どもに指導者がどう対応すれば良いかについて、「得意なことと不得意なこと、その両方が受け入れられれば、子どもの悩みは軽減します。不得意なことには協力を、得意なことには評価をしましょう。ありのままを受け入れ、サポートをすればあとは自分で成長していきます。」「ささやかな喜びに瞳を輝かせて語っていた考太。私たちは大きなことを望んだわけではありません。たしかな毎日を過ごしていただければいいです。この子たちに罰を与えるのは、間違っています。大声で叱っても効果はありません。力で押さえても理解できません。子どもを伸ばすのは成功体験です。」と示した。そして、講演を次のように結んだ。

「今日は、『水泳でも熱中症になる』ということと、てんかんというのは、大変な病気だということではなくて、世間で普通に生活して行けるんだということをお伝えしたいと思いました。今日は有難うございました。」

## 参加者の感想

- ・ 本日はお忙しい中、有り難うございました。水泳で熱中症になるというのは、あまり聞いたことがありませんでした。しかし今回、外だけでなく屋内でも熱中症になりやすいと改めて知ることができました。てんかんについても知ることが出来てよかったです。動画を見て成長している姿に、頑張り屋さんな考太君だったんだなと思いました。
- ・ 障がいのある方を利用して不正受給を行ったり、罰金を課したり、死後なお悪く言われたりというのは、許されることではないと思いました。設備が悪いなら、指導者はそれを考慮し、休憩やメニューを調整すべきです。スポーツの専門家として指導を行う人間として、信じられません。「褒めて伸ばす」というのは最もよい方法だと思います。楽しいものほど上



達することは間違いありません。色々な人に寄り添い、色々な人を理解できる人間になりたいです。

- 水泳中の脱水症状については注意したりしていましたが、熱中症について考えたことはありませんでした。また、てんかんという言葉はよく聞いていたが、実際にどういうものか知りませんでした。今回のお話をもとにもっと知識を身につけていきたいと思いました。つらい経験をお話して下さり、ありがとうございました。
- 水泳を習っていましたが、熱中症になることを知りませんでした。今まで自分も練習中に飲まなかったもので、もし指導するとしたら水分をとる時間を入れてなかったと思います。今日お話を聞けて、まだ知識不足だと感じました。
- 考太さんの事件は、指導者の気持ちが理解不能であり、完全に指導者の責任である分、悔しいという気持ちは想像を超えるものだと思います。間違っていることを正しいと思い続けていることが一番の恐ろしいと感じました。また、指導者とは、技術以外にも、知識であったり、人としての気持ちも大事であると思いました。貴重なお話を聞かせて頂き、感謝します。
- 貴重なお話を有り難うございました。ここ数年、夏季の異常な高温が続くため、私の職場では、屋外プールの温度は何度が最適なのか、ということで大議論を交わしています。厚労省等からは、これといってハッキリとした外気温、水温の基準は示されておらず、結構根拠無く、水温+外気温 $\leq 50$ の場合は冷たいので入らない、というルールのみで運用しており、それでは異常に高温な場合はどこまで大丈夫なのかという点については、各学校や園毎に決めていると思います。今日の資料では、「水温は(競技中を通じて)25℃～28℃」という記述がありましたが、今年の場合ですと(私の所の場合)全滅となります。ぜひ、国の方で基準をしっかりと提示して欲しいと感じました。(ご謙遜されていましたが、器械体操の演技、非常に上手なお子さんであったことが分かりました)
- 水泳でも熱中症になるという認識をもっと広げていかないといけないなと思った。水泳は自分も小学校6年間やっていたので分かりますが、一切休憩がなかったら誰でも倒れてしまうと思います。水泳は水で行う

スポーツなので、汗をかいても分かりづらいため、他のスポーツより休憩や水分補給が必要だと思う。

- 障がいのあるなしにかかわらず、「頑張ればできると思わないこと。頑張ってもできないことがあることを理解し、子どもを受け入れる」ということはとても大切なことだと思いました。また、「てんかん」に関することもうかがうことが出来て、大変学びになりました。

## 救命救急講座〈熱中症編〉



フィールド上で熱中症の選手が出た場合、「熱中症である」と、どこで判断するか。熱中症に伴う「けいれん」とはどのようなもので、119番通報した際にどのようにその状態を言葉で伝えるか、という導入から始まり、緊急時の対応の最初に必要となる「緊急度判断」について詳しい解説が行われた。実習としては、傷病者が「呼吸をしているかどうかをどうやって確認するか」、「脈拍をどう確認するか」について、学生2人1組のペアになって実際にいった。

次に、熱中症の重症度判定とその症状についての講義があり、特に傷病者を観察する際、「記録を取る係」を指定して、時間とともに「何があったか」「どのような状態であったか」を、紙に記載して残しておくことで、救急隊員への引き継ぎや医療行為を行う際に非常に有用な情報になることの解説が行われた。

## 参加者の感想

- 今回の講習で熱中症の恐ろしさを改めて感じる事ができた。熱中症にならないための予防と熱中症になったときの対応を専門的に学習できたので、いざそういった状況に出くわしても、冷静に適切な対応が出来るようになりたいです。

- ・ 知らなかったこと、改めて気づかされたこと、たくさんありました。もっともっと知識量を増やしたいなと思いました。
- ・ 人の命がスポーツによって奪われることは簡単だ、しかも自分（指導者）のやり方次第で、ということが分かりました。まずは、そうした危険な場面を作らないこと、応急処置のやり方をしっかりと学ぶことが何よりも大事だと痛感しました。今後、日体大生として、スポーツと深く関わっていく以上、私は自分も人の命も守るために、学ぼうと思います。
- ・ 相手の呼吸を確認する実習があったが、全然相手がどのように呼吸をしているのか分からなかった。倒れた人が出た時には時系列にして記録を取ることが後々に大切になることが分かった。
- ・ 今回の実習でⅠ度、Ⅱ度、Ⅲ度と段階によって治療の仕方、対応が違うことが分かりました。身近で起こるかもしれない熱中症は対応の仕方をしっかり覚え、自分も熱中症にならないよう体調管理をしっかりしていきたいです。
- ・ 熱中症に関して、浅い知識しかありませんでしたが、詳しく知ることができました。また、熱中症が改めて恐い病気であることを実感しました。ただ救急車を呼べばいい、冷やせばいいだけではなく、どのような症状であるかをきちんと見るのが大切であり、時系列を記録しておくのが一番重要であると分かりました。素早く対応出来るようにしておきたいと思います。
- ・ 学部でも救急救命実習や熱中症の知識に触れる機会があるが、今回の講話でも改めて大事な要点を復習する機会をもらえた。記録がどれだけ大切かも改めて分かった。
- ・ 呼吸は思った以上に気づくのが難しいと感じました。もし倒れている人を見つけたときに、冷静になって初期評価ができればよいと思います。実際は冷静になれないかもしれませんが、できるだけ落ち着きをもってやれればと思います。また、もしその現場に遭遇したら記録と発生状況を必ず掛けるように、ペンと紙は常に持っていようと思いました。

## 【第2回】

## コンタクト・スポーツでの 重大事故から学ぶ研修会

- 田中義之さん(柔道事故被害者の会)
- 倉田久子さん(柔道事故被害者の会)
- 金澤功貴さん(摂南大学)

### 《概要》

#### 【講演1】「柔道授業中の心臓震盪事故」

高校2年生の田中義章君は、試合形式での柔道の授業で柔道部員の相手と対戦中、10：10頃に心臓震盪を発症して搬送先の病院で11:15に死亡が確認された。また、授業担当教諭は1名であったのに、計4面の試合会場で同時並行に4試合も行っており、審判を初心者生徒に任せていたため、担当教諭はこの事故を目撃していなかった。速やかに119番通報してAEDによる処置を行えば助かっていた命であった。

#### 【講演2】

#### 「名古屋市立向陽高校柔道部頭頸部外傷死事故」

高校1年生の倉田総嗣君は、初心者で入部した柔道部の練習中に頭を打ち、頭痛が消えない状態で練習に復帰、再度頭部を打ったことで、急性硬膜下血腫を発症。きわめて重大な事故でありながら、学校側は誠意を持って対応し、校長や教頭らは入院中の総嗣君を毎日見舞い続けた。総嗣君が亡くなった後も、遺族と学校側との温かな交流が続いている。

#### 【講演3】

#### 「菅平でのラグビー部合宿中の頸部損傷事故」

高校1年の時、菅平高原で行われた夏合宿の練習中に、頸椎の4番5番を損傷した金澤功貴さん。大けがで深刻な後遺障害を負ったが、ラグビーへの情熱を持ち続け、3年時には主将として全国大会に出場した。現在は摂南大学の法学部で社会科教員の教職課程も履修し、今年の6月には母校の高校での教育実習を終えた。

## 田中義之さんの講演

スライドに、色白でスレンダーな少年の姿が映し出された。

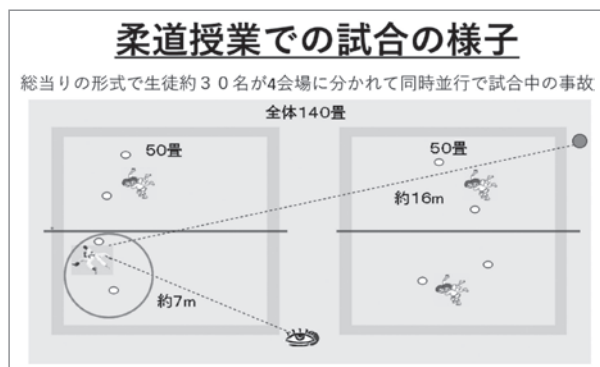
「これは私の息子で、義章（よしあき）といいます。事故当時は、県立高校2年生でした。16歳と10か月で、



17歳になる前に、事故で亡くなりました。これは9月に学園祭があった時の写真で、これが一番新しい写真になってしまいました。右の二枚は、バンドでギターをやっていた時の写真です。息子は、事故が起こるまではまったく健康でした。」

学校からの第一報は、「授業中に意識がなくなった」というものだった。田中さんは「授業中」と言われ、教室で、いわゆる座学の勉強中に意識がなくなったものだと思います。「なぜ?」と疑問に感じた。

最初に駆けつけたのは妻で、その時には心肺蘇生の最中だったという。義之さんが遅れて駆けつけた時には、もうすでに手の施しようのない状態であり、義之さんは何度も義章さんの名前を呼んだが、何の反応もなかった。



後から分かったことだが、授業は座学ではなく保健体育、しかも柔道を行っていた際に起きた事故だった。授業はいわゆる「総当たり戦」の対戦形式で行われていた。体育の授業には3か月間という期間が充てられていたが、担当教諭は1年次から、授業の参加率を増やす目的で全員での総当たり戦を計画していて、その仕上げとして9月から始めた試合形式での柔道授業で発生した死亡事故だった。

この「総当たり戦」では、1つの試合場（畳縦8枚四方の中央に畳5枚四方の場内を設け、畳50枚を敷いたもの）を半分に仕切り、同時並行で4試合行うことで、30名ほどの生徒の全員がもれなく試合を行うことが出来るようにしていた。そして各試合の審判は生徒が努め、体育教師はこの4つの試合会場を見回っていた。

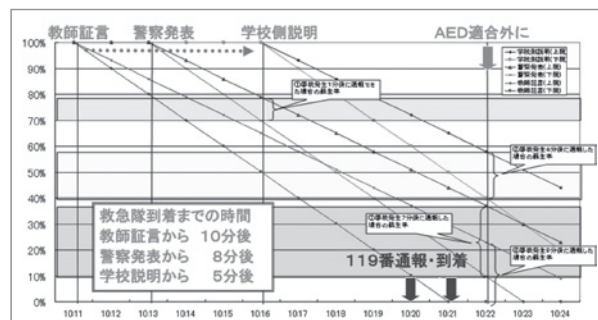
義章君は、柔道部の生徒と組むことになり、攻防を行ううち、大外刈りで倒された。しかしその際、スパンと倒れず、「トットット、パタン」という感じで倒れたため、審判は「技あり」と判定した。そのため、相手の柔道部員はさらに1本を狙って「袈裟固め」を仕掛けてきた。義章は、袈裟固めを掛けられた直後から5秒くらいは何とか逃れようとしていたが、やがて完全に動きが止まってしまった。そのため相手の柔道部員は、義章君があまりに

も静かに押さえつけられているので、「おかしい」と思い、ちょっと冗談半分に「生きてるか」と声を掛けた。その様子を見ていた審判は素人であるため、義章君の状態を見て「息しているから大丈夫」と言った。

そして、20秒ほど柔道部員が抑え込み、「一本」の声に、その部員さんは立ちあがった。しかし、義章君は身動きもせずに倒れたままであった。この異常な状態を教師は見ておらず、事故に気づいていなかったために、生徒が教師を慌てて呼びに行った。生徒たちはもちろん、状況を理解していない教師は、義章君の身に何が起きたのか、理解できなかった。後に、状況から判断して、心臓震盪が起きたものであると推察された。

「どうしてここで心臓振盪が発生したかということ、実際に見ている人が誰もいないので、多分、組手の相手に倒された時に、相手の拳とか、肘とか、あと脇腹ですね。が、心臓の真中あたりの胸部に当たったんじゃないか、と想像しています。」

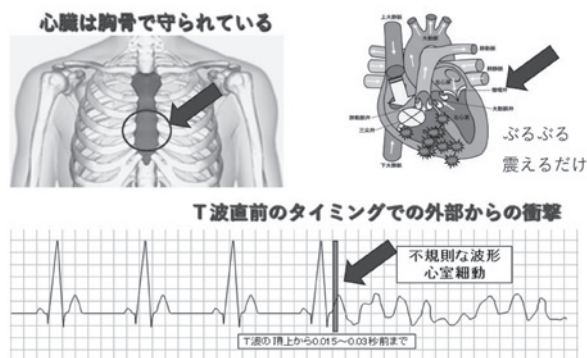
心臓震盪とは、外部的要因により心室細動になることであり、AEDによる早期除細動が有効であると考えられている。この高校にはAEDが設置されていなかったものの、校舎の100mほど先には消防署があった。すぐに救急要請し、胸骨圧迫をしながら救急隊員の到着を待っていれば、速やかにAEDが装着され、救命が可能であっただろう。



しかし2005年当時、心室細動についての一般の認知は低かった。そのため、義章君についても「息をしていたし、意識を失っているんだろう」程度の考えで、即座に救命救急を施すことはなかった。

「このスライドは、縦軸が蘇生率の%、横軸は時間を表しています。心肺蘇生をすると、若干蘇生率は伸びるが、1分遅れるごとに蘇生率は10%ずつ落ちて行ってしまう。事故当時の体育教師の説明では『10時10分くらいに事故が起きた』ということだったので、警察発表の時間はそれより遅れていまして、学校の説明になると、さらに時間を遅られました。実際の119番通報は、確実に分かっている。共通して

『10時20分』ということなので、消防車が来た段階で、実際にはかなりの時間が経過していたため、いわゆる『AEDをやっても使えない』という状況でした。やはり速やかに119番通報をしていれば、と思われます。」



「じゃあなんで、心臓振盪ってというのが起こるのか、ということです。この上の絵の、胸骨というところは赤い部分ですね(左上図)。胸骨圧迫というのは、この下にある心臓を圧迫するということです。ただですね、18歳未満までの、いわゆる成長過程にある人は胸がまだ柔らかいんです。胸骨がまだ完全に硬くなっていない状況なんですね。だから、そこに何かが当たると、かなりの確率で心臓に影響があります。ただ、『誰でもなっちゃうのか』というと、実はですね、絶妙なタイミングがあるんです。この心電図の、大きなパルスの次にちょうど外部刺激があることで、起きるそうです(下図)。」

心臓はほとんどが心筋という筋肉でできており、この心筋が収縮してポンプとなり、全身をめぐる血液が上大動脈を通過して心房に送り込まれ、そこから心室に押し出され、さらに肺動脈を通過して全身に血液を送り出す。その過程で、前胸壁に衝撃が加わると、心臓が痙攣して心臓のポンプ機能が損なわれ、血液を全身に送り出す動きができなくなるのだ(右上図)。

田中さんは、心臓震盪に詳しい埼玉医科大学総合医療センター救急科の興水健治医師が作成したスライドを用いて、心臓震盪に関する実証データを次々と示した。

「日本における突然死というのは、年間だいたい10万人に上るそうです。そのうちに心臓に原因があるものが6割、そのうち、心臓が停止する不整脈である心室細動が、70～80%。年間4万数千人が心室細動で死亡していて、これは交通事故死の6倍に上るそうです。」

心室細動の発生原因は、中高年であれば虚血性心疾患が多いとされているが、若年者はスポーツ中が多いという。そして、スポーツ中の突然死の原因として、心臓振盪は肥大型心筋症(26.4%)に次いで19.9%となっている。

いわゆる「Bystander CPR」、救急現場に居合わせた人がその場で救命措置をした場合としていない場合では、当然前者の方が傷病者の予後は良好であるという。

「考察として、競技スポーツでは、BystanderがCPRをしてくれる割合が高い、AEDの使用率も高い。その結果、社会復帰率が優位に高くなっている。これは、関係者や観客に医療従事者や救命講習受講者が多くなったということが大きいです。ですから、スポーツ関係者は定期的に救命講習を受けて欲しいと思います。そして実際に、選手も交えたシミュレーションを行っておくことが大切です。誰かが倒れた時、誰がどう動くのか、ということをやっておいた方がいいです。そして、スポーツをやる場所にAEDを持っていくこと。レクリエーションスポーツの場となる公園などにもAEDを設置して欲しい。そして、保護者たちにも講習を受けて欲しいと思います。」

## 参加者の感想

- ・ たまに部活後に、柔道を遊びとして行うことがあるが、今回の田中さんのお話を聞いて、下手したら受け身が出来ず、心臓震盪などが発症してしまう可能性があるので、細心の注意を払いたいと思いました。
- ・ 授業では経験者、初心者が混じって行われるので、しっかりと全体を見れるかたちで授業を考えていかなければならないと感じました。私も今、日体の授業で柔道をとっているので、初めて人を投げることの難しさや、受け身が出来なかった頃の気持ちを忘れず、一人一人のペースをみて、全体の授業速度も考えられるようにしたいです。ありがとうございました。
- ・ 教師になるということは覚悟がいることであると思った。40名を1人でみなければならず、いざという時に自分に対応できるのかと不安になった。人の子どもを預かるという責任を感じながら、日々勉強をしていかなければならないと感じた。
- ・ 先生が見れていない中で起きて、生徒も事故の詳しい内容などを誰も知らないという、たくさん問題点がある事故だと思いました。一見、息をしているから大丈夫と思いがちだと思うし、そう思いたいという気持ちもあるのかもしれないけれど、一人の命をどれだけ考えられるのか、救うために何ができるのか、何が原因でそれを改善するためにはどうしたらいいのかを、全

員が考えていかなければならないと思いました。貴重なお話をありがとうございました。

- ・授業の中にも危険が潜んでいることがよくわかりました。教師の立場としては、安全指導をすること、しっかり監督をすること、もしもの時に正しく素早い処置ができることが必要だと感じました。いつ人の命が危険な場面に出くわすか分からないので、講習会に参加する必要があると感じました。
- ・心臓震盪が起こっても、何が起きているかを正確に理解することが難しいということが分かりました。少しでも異常があったらAEDを持ってくるというのは覚えておこうと思います。また、高校以来受けていない救急救命講習をもう一度受けに行こうと思います。
- ・意識があるか分からない状況でも躊躇することなくAEDを使うことが大切だということを学ぶことができました。また1人では厳しいので救助する人を呼びに行くことも重要だと知ることができました。
- ・貴重なお話をありがとうございました。私も柔道を行っており、将来指導者になり、部活動指導者だけでなく、授業で指導する場合が出てくるかもしれないです。その際、こういった事故が起こり得るということを知れてよかったです。心臓震盪という事例は聞き慣れない言葉で、こういったことが起こり得るということすら知りませんでした。あらゆる事故を想定し、対応できる指導者になりたいです。

## 倉田久子さん講演

### 「日体大の皆さんにお願いしたいこと一名古屋市立向陽高校柔道部事故に学ぶ」

「こんばんは。全国柔道事故被害者の会の代表を務めております、倉田と申します。名古屋から来ました。私は2年前にもここで話をしました。その後、出席者のアンケートを読んで、『日体大の学生さんは、なんて真っすぐできれいな心を持っているんだろう』と思いました。その心を持って社会に出て行ってもらいたいという思いで、今日はいくつかのお願いをします。」

倉田さんは最初に、中学校時代に美術部だったという総嗣君の描いた絵をスライドに映し出した。「部室からの風景」、「静かな丘」、「優しい近未来」、「霧」。

「高校に入学すると、「強くなりたい。身体を動かしたい」と言って、柔道部に入りました。初めて経験する運動部です。総嗣は身長160cmと、小柄でした。」

4月に柔道部に入部した総嗣君は、5月になって、部活動中に頭を打った。その後ずっと頭痛が続いているということを20日に知った久子さんは、翌日の21日に日赤病院の休日外来を受診させたが、CT検査の結果「異常なし」ということだった。しかし翌週になっても総嗣君は「まだ頭痛が取れない」というため、26日に大学病院の脳神経外科を受診した。そこでも異常は指摘されなかった。それから2週間は中間テストのため部活動が中止であり、頭痛も治まりつつあった。

6月になって、部活動が再開し、総嗣君が6月13日に「8日にまた頭を打ってから頭痛が続く」と訴えたので、14日に同じ大学病院の脳神経外科を受診した。そこで医師に「柔道をやってもいいのですか」と聞いたところ、「意識障害が出ていたら脳振盪なので、スポーツは避けなければいけませんが、今回は頭痛だけなので」と言って、頭痛薬を処方されたという。

「実は、頭痛薬というのはこの場合は、頭の痛みを分からなくするだけの薬で、頭痛の原因そのものを治す薬ではありませんでした。総嗣の脳は、『いま脳震盪を起こしているよ!』ということ、頭痛というサインで必死に知らせてくれていたんです。」

その翌日である6月15日に頭痛薬を飲んで部活動に参加した総嗣君は、乱取りで、体重差25kg、身長差20cmの大柄な先輩から大外刈りで投げられ、受け身が取れずに頭を打った。その数分後に意識を失い、救急搬送され、急性硬膜下血腫と診断された。緊急手術が行われたものの、その後は意識が戻ることなく、38日後の7月23日に亡くなった。

「この事故は、誰かに知識があれば、十分防げる事故だったんです。この事故から見えてきた原因から、事故の未然防止のために、皆さんに5つのお願いをします。」

①情報の共有化をはかる。「総嗣が部活動中に頭を打って、続く頭痛のために病院に行ったということを、担任、体育の先生、養護教諭、それから一部の部員は知っていましたが、顧問にだけはこの情報が伝わっていませんでした。もし顧問の先生が知っていたら、総嗣を部活動には参加させなかったと思います。皆さんが先生になった時、子どもたちの体調管理については、一人で責任を持とうとしてはいけません。顧問、担任、養護の先生、主任の先生、その他の先生、そして保護者、そうした方々と情報を交換して、多くの目で見守るようにして下さい」



い。子どもたちだけが知っている情報もあります。それを、先生に話させる習慣を付けてください。」

**②体力や技能に見合った指導を。**今の子どもたちの体力差、技能差はかなり大きいと思います。身体能力の高い皆さんには理解し難いかもしれませんが、前回もできない子が柔道部に入部してくることもあるんです。上達の遅い子には、「君はまだまだ受け身だけを練習しないといけないよ」「あなたはもっと基礎練習をしないといけないよ」と、教えてあげて下さい。その時、「君の身体が、君の命が一番大事だから、無理をせず、自分のペースで進もう」と、子どもが納得できるような言葉で教えてあげて下さい。具合が悪い子には、「今日はあきらめて、この次頑張ろう」と言ってあげて下さい。

**③「大丈夫？」は、NG!** 子どもたちは「大丈夫か？」ときかれたら、たいいてい「大丈夫です」と答えます。それを「ああ大丈夫なんだな」と、そのまま受け取ってしまうと、事故に繋がる場合があります。総嗣も、頭を打って、頭の中で出血が始まっているのに、先輩に「大丈夫か？」ときかれた瞬間、「大丈夫です」と答えています。その後、ものの数分も経たないうちに意識を失って倒れています。全然大丈夫じゃなかったんです。だから、子どもたちには「どうしたの？」ときいてあげて下さい。

**④体育の先生・スポーツの指導者は、まず、国語の先生になって下さい。**子どもたちの言葉を引き出す、子どもたちに言葉で伝える、テクを身に付けて下さい。暴言や罵倒は、言葉ではありません。

**⑤「スポーツは危険を伴う」と、まず教えてあげて下さい。**コンタクトスポーツに限らず、スポーツには常に危険が伴います。「柔道は、これまでに亡くなった子がたくさんいる。危険を伴うスポーツだよ。だから注意してやらなければいけないんだよ」というレクチャーを受けた子どもと、「みんな初心者だから大丈夫」と言われて安心して入部した私の息子と、どちらが重篤な怪我のリスクが高いと思いますか？ 子どもたちには「どうしたら安全に楽しめるか」を教え、考えさせながら指導してあげて下さい。

この後倉田さんは「先生方と歩んだ8年一向陽高校の事故後の対応について」として、事故直後、そして総嗣君が亡くなった後の向陽高校の先生方の対応について触れた。

事故直後、総嗣君の手術が終わる深夜まで校長先生と教頭先生は待っていて、開口一番「学校で起きたことはすべて学校の責任です。お詫びの申し上げようもございません」と、深々と頭を下げたのだという。

「この時、私たちには先生方の謝罪の意味がよく分

かっていませんでした。「なんで校長先生が謝るのだろう」とさえ思いました。事故直後に、校長と教頭が被害者家族に心からの謝罪をすることが、どんなに稀で、どんなに重要なことであるかを知ったのは、もっと後です。学校からの一言の謝罪もない、たくさんの事故事例を聞いてからでした。」

また、事故直後から、教頭先生と顧問が中心となって、部員から事故状況の聴き取りを行い、そこで得られた事実をすべて家族に知らせただけでなく、家族からの部員への「直接の聴き取り」の要望にも応じてくれた。最終的には、別室間での「筆談」という方法にはなったものの、倉田さんは、部員が一生懸命に事故の状況を思い出して紙に書き出してくれたことで、「必要なことはここですべて出尽くした。隠し事などまったくないだろう」と思ったのだという。

総嗣君が入院中の38日間、校長と教頭、顧問、担任が午前と午後の2回、欠かさずにお見舞いに訪れ、意識のない総嗣君を連れ戻そうと、一生懸命声を掛け続けた。そして総嗣君が亡くなった時校長は、病院の霊安室に横たわる亡骸に「倉田君、三年間学校に通わせてあげられなくて、本当にごめん!」と、涙を流しながら頭を下げた。

総嗣君の死後も「倉田君はすべて他の生徒と同じように扱う」ということが、校長により徹底されていた。学年が上がる際には元のクラスの名簿の最後に必ず名前を載せてもらっていた。遺族には在校生の保護者として対応し、学校祭などの行事にも呼んだ。卒業アルバムには写真と名前が載せられ、卒業式には、久子さんが総嗣君の代理で出席し、壇上で卒業証書を受け取った。

「子どもが亡くなって、姿が見えなくなっても、卒業まで学校に子どもの居場所があるということは、深い深い悲しみの海で溺れている遺族にとって、一筋の光です。」

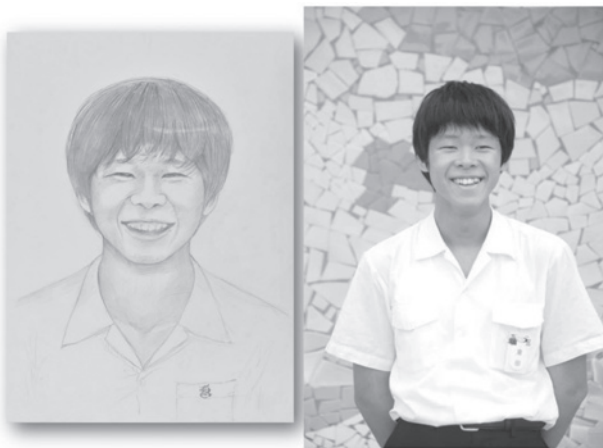
月命日、命日には、関係した先生方が焼香に訪れ、柔道部の顧問が柔道部員を連れてきてくれることもあった。

「そのお陰で、同級生の子たちとのつながりもできました。総嗣の友人である彼らは、今では私の大事な友人でもあります。」

久子さんは「向陽高校の事例は向陽高校の事例でしかない」とし、事故後の対応として大切なのは「向陽の先生方がどうしてそういう判断をして、どうしてそういう行動をとったのか」を考えることで、その判断と行動は、ずっと継続することが必要なのだという。向陽高校の元校長先生と元教頭先生は、「一人の子ど

ものの命 一人の子どもの人生を重くみる」、「学校は、預かったお子さんを、絶対に預かった時の姿のまま家庭に返さなければならない」、「隠さない、すべて明らかにしていく、すべて誠実に」という信念を持っていたからこそ、被害者家族の立場に立ち、そのニーズを満たし、寄り添うことができたのだ。

「向陽高校の先生方とは、気遣いのやり取りがありました。教頭先生の言葉です。『総嗣君の容態を心配して付き添う倉田さんに、余計なエネルギーを費やさせることだけは避けたかった。学校側が保護者の意に沿わない対応をすることで、落ち着いて総嗣君を見守ることが出来なくなってしまいます。だからそうならないよう、可能な限りご家族の気持ちに寄り添った対応をするよう心がけました』。そして長男は、焼香に訪れていた校長先生を見て、『総ちゃんのことがあったから、校長先生はやつれたんじゃないかなあ』と気かけ、顧問の先生の将来に傷がつきはしないかと心配していました。人は、自分が気遣われることで、相手を気遣えるようになります。気遣いがあれば、気遣いさえあれば、いじめも差別も、紛争も戦争もなくなるのではないかと思います。」



総嗣君と、総嗣君の兄が描いた肖像画

倉田さんは最後に、本学教員である南部さおりが作成した『部活動の安全指導—先生方に心がけて頂きたいこと』と、その改訂版である『部活動・スポーツにおける安全指導・事故対応の手引き—事故を防ぐために、そして事故が起きたときのために』を紹介し、後者の最後にある「あとがきに代えて」として倉田さんが書いたメッセージを引用して結んだ。

『部活動・スポーツにおける安全指導・事故対応の手引き—事故を防ぐために、そして事故が起きたときのために』は、本研究所のHPより入手可能であり、是非一読して頂きたい (<https://www.nittai.ac.jp/kikikanri/pdf/guidance.pdf>)。

## 参加者の感想

- ・私も、将来は教師になりたいと考えています。その時に、いつ何が起きるか、どんな事故が起きるか分からないですが、子どもたちの命を預かっているということがどれだけ重大なことなのかを常に考え、子どもたちの小さな異変に気づいて、少しでも事故を減らせるようにしたいと思います。被害者とその家族にどれだけ向き合い、寄り添うことができるか、それが大事だということが分かりました。
- ・私も将来、指導者になる立場として、子どもたちの様子の変化や体調の変化を見落とさないように、正確で適切な言葉がけが必要だと改めて感じました。安易な考えや思い込みで、大切な命を救えない、救ってあげられなかったとなると、後悔だけではすみません。それを一人でも多くの指導者、生徒、子どもたちが理解できるように、私はこれからの行動、言動に気をつけて行きたいと思います。そして卒業まで学校に居場所がある。そのために学校の先生が行ってきたことは、どの学校のお手本にもなると思いました。生徒一人一人の命の大切さを理解している、これが当たり前になればいいなと思います。
- ・事故を防ぐためには教師がしっかりできなければいけないと改めて感じました。体育の先生、スポーツの指導者はまず国語の先生でいて下さいという言葉に、まさにその通りだと感じました。指導者の立場に立つ際には必ず危険性を伝えてから、生徒たちにも意識をしっかりとさせるようにしようと思いました。
- ・体育を教える前に、まず言葉をかけていこうと思いました。言葉のかけ方によってその人の行動が変わり、命を救うことができるかもしれないので、言葉のかけ方を学んでいこうと思いました。情報を共有することも大切で、何かあったら誰かに言ってどのような対応をすべきか、学んでいきたいと思いました。
- ・まず、決定的な悪い人がいなくても起こってしまう事故もあるのだと痛感しました。そして、事故に当事者の意識の甘さなども関わってくるし、それ以前にスポーツには危険が伴うということを指導者が伝えたり、意識しておくことが本当に大切なんだと感じました。この話はこれから教師となる私たちだけでなく、

今現在教育現場で働いている教員たちにも聞いて欲しいと思いました。事故後の対応についても、全国の教員が聴くべきものだと思います。本日はお話をまた聴けて良かったです。

- ・ 以前も倉田さんの講話を聞き、何度聞いても心が痛みます。コンタクトスポーツである柔道などで頭を打って何日も頭が痛いということは、すぐに脳震盪を疑わなければいけないと思いました。また、どんなスポーツでも事故はあると思いますが、事故にならないよう、出来ることは沢山あるし、生徒のSOSに素早く対応すれば総嗣君のような悲しい結果にはならなかったと思います。今後このような場合に生徒を助けられるように一生懸命学び、少しでも多くの人を助けたいと思いました。
- ・ 自分は今までスポーツの技術方法のことしか頭にありませんでした。「体育の先生はまず国語の先生になりなさい」という一言はとても心に響きました。人とコミュニケーションを取れない人は命を預かる資格はないと思いました。
- ・ 元校長先生のように、生徒1人1人の身を案じ、最後まで子どもの命を預かっているという責任を持ち続ける立派な教員を目指したいと思った。その上でどういう教育方法をしたらよいのか、この学校で学んでいきます。
- ・ スポーツに事故はつきものです。残念ながら0にはできないと思います。私は教員を目指していますので、それでも、事故を未然に防ぐ行動を一番大切にしていきたいと思います。事故が起きてしまったら、どんなに不利な状況になっても、隠さず、すべて明らかにしなければならぬと、改めて認識できました。今回のお話を聞いて、様々なリスクに対する知識を付けることはもちろんですが、生徒一人一人のことを考え、寄り添える教員になりたいと強く思いました。

## 金澤功貴さん講演

### 「スポーツ事故からその先へ。」

金澤功貴さんは、1997年生まれで現在21歳。摂南大学に在学する、現役の大学生だ。功貴さんがラグビーに出会ったのは小学校4年生の時に、「なんて楽しいスポーツや」と思ったという。それ以降はラグビーにのめりこみ、中学校に上がると、平日はラグビー部で汗

を流し、休日もラグビースクールに通うほどだった。

「そんなラグビー漬けの毎日が実ったのか、中学校3年生になった時には大阪のラグビースクールの選別メンバーに選んでもらって、主将として全国大会で優勝させてもらいました。この時は順調にラグビー人生を歩んでいて、常翔学園という高校に進学することになります。なぜ常翔学園に進学したのかというと、僕が中学校3年生の時に常翔学園が花園の全国大会で優勝していたんですね。で、この優勝した常翔学園のラグビー部のキャプテンの人に僕はすごく憧れて、僕も常翔学園に入って、キャプテンをやって全国大会で優勝したい、っていう夢を持ちました。」

常翔学園に進学した高校1年生の時、毎年恒例の長野県営平での夏合宿中のことだった。憧れの高校のラグビー部に所属したものの、当時同じポジションにいた先輩に比べて小柄であった功貴さんは、なかなかAチームでプレイをすることができなかった。同級生の中にはAチームにベンチ入りする生徒も数名いたため、「負けられへんなあ」と思い、入部は合宿のある8月まで練習をびっしりやり、体を大きく作るためにご飯を1日に4食、5食くらい食べるなど、かなりの努力を続けていた。

「そんなことをして、やっと夏合宿の時にAチームでやらしてもらって、その時ちょっと、足を痛めていたということもあったんですけど、でも『ここで練習を休んでしまったらAチームから外される』という気持ちもあって、『何とか練習に残りたい』という気持ちでちょっと無理をしながら、夏合宿を過ごしていました。」

その夏合宿の8月12日、「ラック」（タックルされた選手が地面に置いたボールを、両チームの選手が集まって奪い合う）の練習中、「ラック」（タックルされて倒れた状態）の金澤さんは、頭から地面に倒れ込んでしまった。首が身体の下に巻き込まれたような恰好になり、チームメイトがその上に乗ってきたのだ。

「写真でいうと、こんな感じの状況でした。このような形で首が体の下に巻き込まれてしまって、・・・で、





練習中やったんで、『次にいこう』と思ったんですけど、身体を動かすことができませんでした。この時に、頸椎っていう骨の4番、5番が、上から圧迫されたことによって、脱臼骨折をしてしまっていたのです。脊髄損傷っていうことになるんですけど、当時の僕は、最初に何が起きたのかまったく分かりませんでした。そこから救急車が来て、病院に搬送されたんですけど、最初はそこまで痛みがなくて、『身体が動かんのは何でやろうなあ』みたいな感じやったんですけど、搬送されて時間が経つうちにだんだんズキズキ痛みが出てきて、だんだんと意識が朦朧として来ました。そして次に気づいた時には、手術が終わった病院のベッドの上でした。」

ベッドの上でも、やはり身体は動かない。昨日まで当たり前にできていたことがもう当たり前ではなくなったこと、大好きなラグビーができなくなってしまったこと、なかなか現実を受け入れることができなかった。

打ちのめされた功貴さんに母が言った言葉が、「怪我をしてもどんな姿になってもあんたはあんたやねんから、今まで通りのあんたでおったらええねん。」だった。

「両親もなかなか受け入れ難くて苦しい状況だったと思うんですけど、母が言ってくれた言葉を聞いて、『ああ、確かに、今まで生きてきた自分自身が変わってしまうんじゃないなあ』と思って、少し気持ちが楽になって、『じゃあ身体が動かないという状況を受け容れるために、これから自分はどちらにいいかなあ』っていうことを考えるようになりました。」

ここで功貴さんが出した答えが「もう一度グラウンドに戻りたい」、そして「復学して、仲間と一緒に卒業したい」というものだった。

「この時、自分の怪我の状態なんかもはっきり分かっていませんでしたし、どのくらいできるのかとか、そんな事もまったく分からない状況ではあったんですが、やっぱり僕はグラウンドに戻ってもう一回ラグビーに関わりたい、ラグビーがしたい、というふうに思っていて、とりあえず頑張ることにしました。」

リハビリを頑張ろうと思っていた矢先、痰が詰まってしまう人工呼吸器を挿入することになった。点滴と経鼻栄養で約1か月間。この時期が精神的にも肉体的にも一番つらい時期だったという。しかし、なんとかその時期を乗り越え、容態が安定してきたため、長野の病院から、地元大阪の病院に、人工呼吸器を入れたまま転院することになった。

功貴さんには、まずは人工呼吸器を外すという目標ができ、それができると「食事を口から摂る」「声を出

す」と、次々と新たな課題が現われる。次の難関は「車いすに乗る」ということ。しかしベッドで寝ていた期間が長かったため、ちょっと身体を起こしただけでも血圧が下がって意識が遠のいてしまう。

「今度は座る練習から始まって、次に車いすに座る練習、という感じで、壁を乗り越えたらまた新しい壁が出てきて、という感じで、リハビリが進んでいくのは本当に一つずつだったんですけど、毎回目標を立てるっていうのを自分の中で決めて、その目標に向けて頑張ることをとにかく続けながら、リハビリ生活をしていました。」

大阪での入院生活は、辛いことばかりではなかった。チームメイトやラグビー関係者が絶え間なくずっとお見舞いに来てくれたのだ。

「ラグビー部の同級生は練習が終わってそのまま来てくれたり、練習が休みの日にもかかわらず、そのまま遊びに来て何時間もいてくれたり、他のチームメイトや監督やコーチ、OBとか、色々な方がお見舞いに来てくれました。その中には、今回ワールドカップの日本代表で活躍されていた堀江翔太選手もいました。色んな人がお見舞いに来てくれて激励してくれて、そんな環境だったので、僕もずっと前向きにリハビリに取り組むことができました。」

学校も、功貴さんの復学の意志を尊重してくれた。入院中の授業を録画してDVDにして持って来てくれ、入院中でも授業が受けられるように配慮してくれたのだ。さらに、教科担当の教諭がテスト期間や休みを利用して病院を訪問し、口頭や代筆という形でテストを受けられるようにしてくれた。これらの対応により、功貴さんは休学をすることなくずっと同級生と同じ学年で進級することができた。

「このようにして、周りの人がすごくこちらの意思を汲み取ってくれて、こういった対応をしてくれたことによって、僕自身も、自分ひとりという時があんまりなくて、夜にちょっと落ち込むことはあっても、ずーっと落ち込んでいるということではなくて、モチベーションを高く保った状態で過ごすことができました。このような入院生活っていうのを送っていた中で、自分の気持ちの中にもだんだんと変化が生まれてきました。お見舞いに来た友達が『早くグラウンドに帰ってこいよ!』っていうふうに声をかけてくれて、それがすごく嬉しくて、『もう一度グラウンドに戻りたいな』っていう自分の願いみたいなものが、だんだん『絶対にグラウンドに戻ってやる!』っていう確固たる目標へと変わっていきました。」

2014年3月9日、怪我をしてから7か月という異例の早さで、功貴さんはグラウンドに戻る事ができた。



まだ血圧が安定していないが、「午前中の3時間」などの形で医師の許可をもらい、病院からグラウンドに通うという日々が始まった。

そしてグラウンドに戻った日からも4か月で、功貴さんはなんと、ラグビー部の2年生の恒例行事であったニュージーランド遠征にも参加した。現地ではラグビー部の仲間が常にサポートしてくれ、功貴さんはバリアがどんどん取り除かれていく経験をした。そして10月には、小樽への修学旅行にも参加している。

「ニュージーランドに行く時に7時間くらい飛行機に乗って行ったんで、小樽に行くのは1時間くらいなので『あー、全然行けるなあ』とかいう感じで、何か自分の中で基準が分からなくなったんですけど、『周りのサポートがあったら色々できるねん』っていうことを、この時に感じました。」

3年生が引退し、新チームが指導した際、チームメイトたちの話し合いで、功貴さんがキャプテンに選ばれた。チームメイトにとって、練習や試合をよく見て一人一人の動きを分析して的確なアドバイスをし、チームを強力にサポートしてくれる功貴さん以外には考えられなかった。功貴さんが抱いた「常翔学園に入って、キャプテンになって全国大会で優勝したい」という夢が、再び始動したのだ。そこからチームは一丸となり、全国優勝出場に向けて猛練習をした。その結果、大阪予選の決勝で無事勝利し、全国大会への出場を果たした。

「ただ、この時の全国大会の結果っていうのが、僕らシード校で二回戦からやったんですけど、そのしょっぱなの試合で天理高校っていう奈良県の強い高校にあたって、3-5で二回戦敗退となってしまいました。なので、僕自身が描いた『全国大会でキャプテンとして優勝したい』っていう夢は実際にはかなわなかったんですけど、その夢に向かって自分が努力したことであったりと

か、それに向かって力を合わせたっていうことによって、すごく僕自身成長することができました。」

その後功貴さんは摂南大学に進学し、大学のラグビー部でサポートを務める傍ら、社会科の教職課程を履修し、この6月には母校である常翔学園で教育実習を行った。実習前には不安だらけだったが、指導教員は社会科の教員であるラグビー部の監督。エレベーター完備、各教室にはプロジェクターが設置されていて、生徒全員がiPadを持っていた。そのため、実習にあたって困ることはまったくなかったという。

「この高校で怪我して卒業するまで、卒業してからも、やっぱり学校が僕自身の意志というのを尊重してくれて、聞いてくれて、その中で何ができるかできないかを相談して実現して下さったので、すごく学校の対応というのには、僕は感謝しています。」

功貴さんは、自らの経験から、「スポーツを行っていく上で、事故が起きてしまった時に、『当事者と向き合って、対話する』ということが重要だ」と語る。

「受傷のことについてはすごく難しいというか、当事者自身の精神的な状況にもよりますし、当事者の家族の環境とか状況もありますし、学校としてもやっぱり補償の部分とかで構えがちになるかもしれませんが、やっぱり当事者とまっすぐ向き合って対話して欲しいな、というふうに僕は思います。」

そして、「当事者の意志を聞いて、当事者と共に歩んでほしい」という。当事者のニーズはまちまちであり、それを汲み取るにも対話は欠かすことができない。

事故を防ぐことはもちろん重要なことだが、スポーツでは避けられない事故も起き得る。そのことをスポーツの指導者は意識しながら常にアンテナを張り、「事故が起きたらどういうことがあるか」「どんなことが必要になるか」「重大事故を想定して保険加入を促す」「事故の当事者それぞれのニーズにどう対応すべきか」「障がいを持つ人の話を聴く」など、スポーツでの事故のことについて考えるきっかけになって欲しいと、功貴さんは結んだ。

## 参加者の感想

- ・大好きなラグビーができなくなり、車いす生活になってしまっても目標を持ち、前を向いて人生を歩んでいることを尊敬する。もし自分だったら挫折してしまうのではないかって思ってしまうので、自分も大きな壁が立ちあがっても、金澤さんのようにしっかり前を向いて生きていきたいと思った。

- ・事故が起こった後のお母様の言葉や、功貴さん自身の「またグラウンドに戻ろう」という前向きな姿勢が素晴らしいと感じました。現実を受け入れるのはそう簡単なことではなかったことと思いますが、休学をせずに同級生と一緒に進学したり、リハビリを懸命に行ったりと、ものすごい努力もされたのだと思いました。怪我をされてラグビーができなくなっても仲間に感謝を忘れないことや主将になり夢を追いかけてたりと、弱気になってもおかしくない状況でも全てを自分の成長へと繋げる功貴さんの姿から、前を向いて生きる大切さを教えて頂きました。
- ・短い時間でしたが、金澤さんの人間性が見られました。「周りの人に支えられた」とおっしゃっていたが、金澤さんの人柄がみんなを引きつけているのだと思った。スポーツでの負の面に目を向けて学べるのが沢山ある研修会だが、スポーツの持つ力というものを感じた。常翔学園とその顧問の先生素晴らしい！
- ・ラグビーを好きだということが伝わってきました。自分は剣道を専攻していますが、どんなに辛いことがあっても剣道のことは好きでいたいと思っています。学校側の対応が本物であり、生徒1人1人のことを考えているんだと思いました。教師を目指す者として、1人1人に対し、高いアンテナを張って見守りたいです。
- ・今回、お話を聞かせて頂き、金澤さんはすごいなと感じました。私は同い年ですが、もし自分が同じ状況になったとしてもリハビリや授業を頑張りがきれないと感じました。7か月でグラウンドに復帰したのは素晴らしいと思いました。怪我をした後のモチベーションの維持は難しいと思いました。ラグビーの練習中に怪我をしたにも関わらず、再びラグビーの世界に戻ることを選択したことは格好いいと思いました。又、周りのサポート、チームメイトの皆さんにも会って話を聴いてみたいと思いました。厳しい状況を経験した金澤さんだからこそ言葉の重みがあり、とっても充実した時間でした。本日は、ありがとうございました。
- ・金澤さんのことは報道番組で特集されているのを観たことがあったので、本人のお話を聴いて、やっぱりテレビというのは一部なんだなと思い、本人からお話を聴いたことが本当に有り難いと思いました。自分の目標に向かって頑張ろうという時に本当に辛

かったと思います。その中で沢山の方々の支援や声援を受けて前向きに頑張れているのが凄いと思ったし、人の力って大きいと改めて思いました。

- ・事故に遭っても常に目標を持ち続けた金澤さんの精神力、意志の強さを感じました。1人ではできないことも仲間がいれば乗り越えられることを実感させられました。自分も今、この瞬間を全力で生きていきたいと思いました！

### 【第3回】

## 心臓性突然死をなくすための研修会

- 松田容子さん(松田伶那さんのお母様・Cross×Three代表)
  - 柚野真也さん・こずえさんご夫婦(柚野凜太郎君のご両親)
- 救急救命講座(心肺蘇生法編)
- 鈴木健介先生(保険医療学部准教授・救急救命士)
  - 原田諭先生(保健医療学部・救急救命専門指導教員)

### 《概要》

#### 【講演1】

当時12歳の小学6年生であった松田伶那さんは、小学校の卒業旅行中に友人とそり遊びをしている最中、突然倒れ、救急隊が到着した際には心肺停止の状態であった。救命救急が適切に行われていないなど、学校側の安全管理体制に疑問を持った母の容子さんは、その後BLSインストラクターその他、救急救命や安全管理に関する多数の資格を取得。子どもの命を守るための安全管理のための活動を続けている。

#### 【講演2】

当時14歳で中学2年生であった凜太郎さんは、体育館で体力測定の一環としてシャトルラン中に意識を失って心肺停止状態となり、2日後に亡くなった。担当教諭は生徒の体調確認を怠り、さらに倒れた後も適切な救急措置が取られていなかった。両親は学校側の対応に疑問を持っており、現在学校との訴訟を行っている。

いずれの遺族も、わが子が意識を失ったその時、学校側が適切な処置を行ったのかということを含め、十分に事実が知らされていないことによって苦しめられており、救急救命措置の重要性とともに、事故発生後の学校側の対応に関しても、われわれに問題提起をして下さった。



## 松田容子さんの講演



「皆さんこんばんは、松田と申します。私は自分の娘を、学校の宿泊行事中に亡くしました。今日は娘の事例を通して、『私たちに何ができるのか』を、皆さんと一緒に考える時間にしたいと思います。」

松田さんの講演は、この言葉から始まった。松田さんは、愛娘・伶那さんの死をきっかけにして、一から「子どもの命を救う方法」について必死で勉強し、アメリカ心臓協会・BLSインストラクターなどの数多くの資格を取得し、2016年にCross×Three（クロスバイスリー）という任意団体を設立。心肺蘇生法、ファーストエイドなどの様々な講習会を行っている。Cross×Threeとは、救命講習、子ども安全管理、グリーフケアの3つを、バラバラではなく、関連性をもって、交錯、クロスさせて活動をしていきたいという松田さんの思いが込められている。

伶那さんは穏やかで優しい子で、大きな病気をしたことはなく、小学校1年生の時に全員に行われる心電図スクリーニングテストでは、異常なしの判定が出されていた。小学6年生では「皆勤賞」であり、まったく健康状態に不安を感じさせる徴候はなかった。

そんな元気いっぱい伶那さんであったが、2013年2月19日から三泊四日で実施された学校行事の卒業旅行のために長野のスキー場に向けて出発し、その2日目に心肺停止で倒れたのだ。

その日、午後3時頃に集合写真撮影のために全員が並んだが、その際、頭を抱えてしゃがみ込んでいる伶那さんの姿を友達が目撃していた。そして撮影後、午後4時まで自由時間になり、友達から外でのソリ遊びに誘われた伶那さんは「具合が悪いから悩んでる」と

一旦答えたものの、結局ソリ遊びをすることにした。しかし、ソリで滑った後に「疲れた」と言って座り込んだため、友達だけが坂を上り、ソリで滑り降りてきたわずか3秒ほどの間に、伶那さんは倒れていた。先生は見えていなかったため、伶那さんの友達が先生に「声のリレー」で異変を伝えてくれた。呼ばれた先生が、伶那さんの名前を呼んでも返事がなかったので、宿の中にいるツアーナースを呼ぶように児童に伝えた。

後に教師は「その場で胸骨圧迫をした」と説明したが、その時に呼ばれて駆けつけたツアーナースは「誰も胸骨圧迫をしていなかった」と証言していて、食い違っている。また宿にはAEDがなく、1キロ離れた宿から借りてきてようやく使用された。

松田さんに連絡が入ったのが、午後4時過ぎ。「伶那ちゃんが雪の中で倒れていて、心肺停止です」と告げられた。搬送先の病院名をメモしようとした松田さんは、手が震えてなかなか書くことができなかった。そして横浜から長野へと向かう途中の電車の中で医師から電話があり、「これ以上やっても伶那ちゃんが苦しむだけなので、蘇生措置をやめたい」と告げられた。

得られた検査データからは何らの異常も見出されず、死因は特定できなかった。そこで、解剖を行うかどうかという厳しい選択が遺族に迫られ、夫が「解剖をしない」という決断をした。早く伶那さんを家に連れて帰ってあげたかったこと、解剖という残酷な響きに、どうしても「やる」という決断ができなかったのだ。

しかし、この時解剖を行わなかったために、松田さんは残された医療記録に基づいて可能な限りの調査を行ったものの、「なぜ伶那さんが亡くなったのか」という事実は永遠に分からなくなってしまった。

「死因に関して、私は懸命に調べました。知り合いの医師一人一人に、個人的に依頼して、救命のドクター、放射線専門医、画像診断医等、複数の医師に見てもらうことができました。推測は様々挙がりましたが、断定できるには至りませんでした。結果、どうして亡くなったのか、未だにわかりません。『あの時解剖していれば』と、とても後悔しています。死因が分からないと、いつまでたっても『どうして死んだの?』『なぜ?』というところから一歩も進めないからです。」

学校行事の最中に子どもが亡くなったにも関わらず、学校側は「問題はなかった」として調査委員会を設置しなかった。そのため、松田さんは何度も学校側と交渉しながら、さらに同級生たち一人一人に電話をかけ、「何でもいいから教えてください」とお願いした。



すると、伶那さんが様々なサインを出していたことが分かってきた。そして、学校側の対応にも次々と疑問が出てくるようになった。例えば、事前にAED設置場所の確認がなく、すぐにAEDが使用できる環境にはなかったこと、非常時対応マニュアルが自然災害時を含めて一切作成されていなかったこと、現地では一切の健康観察が行われていなかったこと、引率する教員が心肺蘇生法の講習を何年も受けていなかったこと…。

「誤解しないで頂きたいのは、私は『これらがあったら絶対に助けられた』と言っているのではなくて、最低限のやるべきことをやらずに亡くなるのと、できることをやったのに亡くなったのとでは違う、ということです。それは遺族にとってだけでなく、学校・教職員や、同級生のお友達にとっても同じことです。目の前で自分の関わった人が、このような形で亡くなれば、大きなものを一生背負ってしまうことになる。私がグリーンケアを、安全管理と救命講習と関連付けているのは、こういうことなんです。安全管理や救命講習をきちんとやることによって、助けられる命を救うことができ、手を尽くしても亡くなった場合も、関係者や遺族のグリーンケアにつながっていく。そういうふうに考えています。安全管理や救急救命のシステム、これらをきちんと整えることは、皆さん自身を守ることにつながっていきます。」

松田さんは、「あの時どうすればよかったんだろう」「伶那の身体に何が起こったんだろう」「何が正しい救命処置だったのか知りたい」と強く思い、どこにでも出かけ、必要と思われる講習を可能な限り受け、資格を一つ一つ取得していった。

「亡くなってしまった伶那に、もう美味しいものを食べさせてあげることができない。一緒に遊びに行くことができない、抱きしめることができない、自分はもう、何もしてあげられないのだろうか、自分は伶那に何がしてあげられるのだろうか。どうすれば伶那を死を無駄にせず、生かせるのだろうか。一つ一つ、こういう歩みを続けています。」

松田さんは、日本の救命救急に関する研修では、管理責任がある際の対応と、通りすがりの際の対応の違いが明確に分けられずに伝えられている風潮があることに疑問を感じている。通りすがりの立場であれば、「助けない」という選択肢もあり得る。しかし、職業的に管理責任がある立場であれば、必ず対応する責任がある。だから、対応できるように訓練や指針、システムなどを準備しておく必要があると強調する。

さらに松田さんは、自らの経験から、救命講習という課題とともに、「安全管理体制」という課題も感じた。現状では、国が「非常時対応マニュアル」の策定を、各学校に丸投げしている。しかし、学校教職員は安全管理の専門家ではない。

「学校教職員は、決して安全管理の専門家というわけではないのです。何か、この人たちは、安全管理について学ぶ機会があったのだろうか、マニュアルにはどのような項目が必要で、どのようなプロセスで策定していくべきか、学ぶ機会があるのだろうか。基準となる決め方は何なのだろうか、考えました。基準となるひな形もなく、学ぶ機会がない中、ゼロから策定して、一定基準を満たしたマニュアルを作る運用を実施して行くと、現場に丸投げされる現状があるのなら、これは国の問題でもあると考えました。現場に丸投げではなく、システムとして構築する体制作りは国レベルで取り組んで頂きたいと思っています。」

松田さんは、「裁判になれば、専門家が『何があったのか』をきちんと調べてくれるという素人考えで、一時は裁判も考えた。しかし、死因が明らかでない以上、「学校側の安全体制の不備」によって伶那さんが亡くなったという因果関係を立証することはできないと、何人もの弁護士から告げられた。安全体制の不備は明白であるのに、その責任を問うことのできないもどかしさは、「子どもが亡くなっても何も改善のための指導がされないなら、同じような事故がまた起きる」との強い思いを喚起した。松田さんは「ならば法律を変えよう」と思い立った。たとえ伶那さんの死と安全体制の不備との相関関係が一生認められなくても、「安全体制に不備があるということ自体が問題だという社会にしたい」と考えたのだ。

「安全管理は、命を守るという大前提はもちろん、皆さん自身を守るためでもあります。安全管理体制を、システムとして整えて頂ければと思います。これには『完成形』というものはありません。どんどん情報は更新されていきます。そして、色々な新しいデバイスや、やり方がどんどん出てきています。これからも学び、発信し続けて、『どうすればいいか』を、皆さんとともに考えて行きたいと思っています。」

松田さんは最後に「未来は 変えていける。未来しか 変えられない」という言葉をわれわれに投げかけてくれた。

「どうか皆さん、それぞれの立場から、この問題を考えてみて下さい。大学生として、教員として、救急救命士と

して、スポーツに携わる人として、インストラクターとして、家族、仲間たち、社会の一員として、様々な視点からお力を頂けたら、未来は変えていけると信じています。」

## 参加者の感想

- ・ 将来、体育教師を目指す身として、教師は生徒を預かる身として責任を負っているため、非常時対応のマニュアルを頭に入れておくことの重要性を改めて理解した。教員は生徒の安全に全責任を負って学校現場に立って欲しいし、自らもそうありたい。そのためには救命の知識を取り入れていきたい。
- ・ ここでもまた学校の危機管理のずさんさがうかがえた。安全管理のシステムさえ作っていなかったというのは、非常に残念である。伶那さんは私たちと同年で、この事故をきっかけとして考えていかないとはいえないと思った。スポーツ場面でもわれわれがこれから指導をしていく中で何があるか分からないから、常に情報をアップデートして対応できるようにしたい。
- ・ 完全に学校側の過失だと思う。そして学校側もその後の対応が信じられない。もし私が学校の人間だったら、声を大にしては言えないが個人的に全ての真実を話すと思う。今日もし目の前に倒れている人がいても十分には応急処置ができないと思うので、これからもっと学問に励もうと思う。
- ・ AEDがない、非常時対応マニュアルがない。この2つは、すごく恐いことだと思いました。AEDは、現在様々な場所に設置されていますが、マニュアルは作るまでの過程が大切という言葉が印象に残りました。スキー場という、特に事故や非常事態が起こりそうな場でこのようなずさんなケースが起こらないように頭に入れておき、自分を変えていきたいと思います。
- ・ 死因が分からないまま亡くなってしまったということを知り、とても心が苦しかったです。激しいスポーツをしていたわけではないのに倒れることがあることを学びました。どんなに元気な子でも突然死んでしまうこともあることを忘れてはいけないと思いました。誰かが倒れていた時、自分は適切な処置ができるようにしておきたいです。

- ・ 亡くなった伶那さんは私と同年でした。突然この命が終わるかもしれないことを再認識し、精一杯生きて、感謝を忘れないようにしようと思いました。同時に、周りの友達の命、居合わせた人の命を助けることができる知識と行動力を身につけようと決心しました。実践できなければ意味がないと思うので、実践できるようにしたいです。
- ・ とても辛いのに行動に移し、色々調べることは誰にでもできることではないのすごいいし、尊敬します。こうやって講習を開いて下さることにより、私たち、教員を目指す側としてもとても勉強になりました。これからも頑張ってください。
- ・ 大切な子どもを預かる場である学校のシステムがもっとしっかりしていれば救えた命だったかもしれないし、事故などが重大なものにならなかった場合は、数多くあると思います。国が曖昧な法律や条令を出すのではなく、もっと責任をもって子どもを守るための対策を講じて欲しいと思いました。自分も将来、教員になり子どもの命を預かる側となります。一人一人の命の重みを忘れずに、取り組んでいきたいと思いました。本日はありがとうございました。

## 柚野真也さん・こずえさんの講演

真也さんは最初の挨拶で、スポーツライターという職業柄、日体大出身の監督と交流があること、その方たちの日体大愛の強さを強く感じていて、日体大には思い入れがあると話して下さった。

「われわれ、2016年5月に息子を亡くしたのですが、それから3年半、未だに真実を知ることができません。学校で起きた事故なのに、『何があったのか』を教えてくださいません。」





真也さんは、凜太郎君が生まれた時に「この子を守りたい」という強い気持ちで、ライフセーバーを目指した。現在も、平日を中心に活動をしているという。

「皆さんには大切な人がいますか？ 愛する人がいますか？ その人が目の前で倒れていたら、何ができますか？ そんなことを思いながら聞いてもらえたら、と思います。」

こずえさんにマイクが渡された。

「息子・凜太郎は、2001年8月17日に生を授かりました。私たちにとって、第一子でした。何もかも初めてでしたが、凜太郎は大きな病気や怪我をすることなく、すくすくと元気に育ってくれました。小さい頃から、外で遊ぶことが大好きな子でした。小学校の頃は虫取りが大好きで、虫かごいっぱいセミを捕まえてきたり、学校の帰り道にトカゲやイモリを捕まえて帰ってきたり、観察して楽しむ子でした。中学校に入ってから、「ライフセーバーになりたい」と目標を見つけ、海での救命救急の練習を重ね、中学生から取得できるWater SafetyとBLSの資格を取得し、高校生になったらもう一つ上の免許を取ることを目標に、日々頑張っていました。」

小・中学校の心臓検診でも異常はなく、持病もなく、中学ではバスケットボール部に所属して元気に活躍し、常に友達を中心にいた。

「毎日学校に行く時は、何度となく『ママ、行ってくるけん』と言う子で、事故が起きた日の元気のいい凜太郎の『ママ、行ってきます！』を思い出します。」

2016年5月13日、当時中学校3年生の凜太郎君は、学校の体力テストのシャトルラン中に、心室細動で倒れた。

「事故の日、学校から電話があり、『意識がない』と聞き、病院に駆けつけました。何時間経ってもあの子には会えず、ずっと病室で待ち続けていました。夜になって、やっと凜太郎に会えましたが、意識は戻らず、手をさすりながら、何度も何度も声をかけ続けました。この三日後、あの子は亡くなりました。亡くなる直前、『パパ、ママ』と、言ってくれました。それがあの子の最期の言葉です。声にならないくらい、小さな小さな声でした。」

たまらず嗚咽するこずえさんをいたわるように、真也さんが話を代わる。

2016年5月13日に体育の授業中、20mのシャトルランをしている時、凜太郎さんの体には異常を知らせる予兆があった。両手を挙げてフラフラしながら走り、周回遅れになりながらも走り続け、やがてコースを外れて校舎の壁の引き戸にぶつかり、中になだれ込むように入っていく、それでもまだ走り出していた。意識

は朦朧としていたという。

凜太郎君が倒れた時点で、体育担当教員が駆けつけた。凜太郎君の様子を確認し、救急車を呼ぶためにその場を離れて事務室に向かったという。このことが、柚野さん夫妻には許せない。体育教員であれば意識のない生徒を確認した際にはただちに胸骨圧迫を開始して、救急要請は生徒でも構わない、誰か別の人間に委ねるべきである。

「倒れてから5分以内にAEDを使用すれば救命率は50%とされていますが、この時間、5分以上経っていたのかなあ、と思いはしました。」

その後の学校側の対応も、ひどいものであった。学校から満足のいく説明は、一切なし。柚野さんが同級生たちから聴き取った内容とも食い違いがかなりあった。そこで、その時の凜太郎君の様子をつぶさに知る体育教師から話がききたいと何度も申し出たが、一度もそれは果たされなかった。「凜太郎に何があったのかを知りたい」という一心で私学振興課を訪れ、第三者委員会の設置を求めた。

そして、凜太郎君の死から半年後、ようやく第三者委員会の設置が決まった。しかし、委員会のメンバーも、要綱も、遺族側には一切説明がなかった。開催は「9回」と決められ、学校が作った報告に沿って調査が行われ、事故から1年2か月後に調査結果が出された。「ですから、一番知りたかった、あの子の様子は、調査されていませんでした。そして、私たちが子どもたちから聞いたことは、どこにも書かれていませんでした。報告書を渡された日、後日委員の方に質問をしたいをお願いをしていました。けれど学校に問い合わせると、『委員会は終わったので、会うことはできない』とFAXで届きました。」

どうしても知りたいことは分からなかったが、それでも調査報告書によって、学校の杜撰な安全管理体制が浮き彫りにされた。

まず、学校には救命処置に関する危機管理マニュアルがなかった。そしてウォーミングアップのための準備運動も、「体温温存のため」という意味の分からない理由で、前半部分だけで切り上げていた。そして、一時救命処置に際しては胸骨圧迫15回に対して人工呼吸2回の比率で行うということを理解していなかった<sup>1)</sup>。「抵抗があった」ため、人工呼吸を行わなかった<sup>2)</sup>。そして、胸骨圧迫をせずにその場を離れている。AEDの操作方法も理解しておらず、機器の電源を付けただけで、凜太郎君の体にパットを貼っていなかった。一番現場を

知っているはずの体育教師が救急車に同乗せず、救急隊員への情報提供が行われなかった——。こうした杜撰な管理体制に対し、第三者委員会は「安全管理主任でありながら市民レベルの知識、技能を習得できていない」とまで苦言を呈していたという。

それから2017年3月になり、校長から柚野家に電話があり、「卒業式には参加できない」と言い渡された。「本来の保護者ではないから」というのだ。

凜太郎君の友人たちが、柚野夫妻に「卒業式に、凜太郎の席を作りたいと思っています。写真を貸して欲しい。」と連絡してきてくれていたこともあり、どうしても納得できなかった柚野さん夫妻は、「親として凜太郎を友だちと一緒に卒業させてやりたい」との一心で、かなりの数の署名を集めた。

そして卒業式当日、「卒業式に参加できなくても、皆さんからもらった署名は届けたい」と思い、学校を訪ねた。すると、学校の周りには教職員が立ち、厳戒態勢が敷かれていた。「校長先生を呼んで欲しい」とお願いしたが、応じてもらえず、それどころか「学校に無断で入った、建造物侵入」として警察を呼ばれ、事情聴取された。

それでも、何度も校長に「出席できるよう」話してくれた保護者たち、凜太郎君を卒業生として皆と一緒に別れを言ってくれた先生、卒業式で凜太郎君の席を作り、代わりに返事をしてくれた生徒たち、最後まで凜太郎君のことを思ってくれた人たちに、柚野さんは感謝の言葉を口にする。

凜太郎君は、三人きょうだいの長男だった。10歳下の弟は当時4歳で、幼稚園のお友達と先生から「お兄ちゃんはお空の上にいる、お星様になって僕を見てるんだって」と教えてもらった。今は小学校2年生になっていて、こずえさんが「お兄ちゃんに会いたいなあ、お兄ちゃん、どこにいるのかなあ」と話した時に、胸を手で押さえて、「ここにいるよ」と言ってくれた。

2歳下の妹は高校生になっており、今年の夏、凜太郎君が目標としていたライフセーバーの資格を取得し、夏休みにボランティア活動として海岸の海水浴の見守り活動をした。彼女は、活動日の日誌に「ライフセーバーの仕事は、溺れた人を助けることだけではありません。一番大事なことは、遊泳者に危険な行為や場所を伝え、未然に事故を防ぐことなのです。」と綴っており、さらに「アドバイスを話すだけでは、なかなか相手に伝わりません。危険な行為もやめてもらえません。だから私はいつも言います。『あなたのことを大事に思っている人がいるのですよ。その人のことを思ってみて下

さい。』と伝えています。」と綴っていたという。

凜太郎君の命は、目標は妹にも受け継がれ、誰かにとって大切な人の命を救うことに繋がっている。柚野さんの講演は、次の言葉で結ばれた。

「息子は、学校の授業中に倒れました。通学途中や、放課後に起きた事故ではありません。息子は、突然倒れた訳でもありません。「助けて」というサインを出していました。正しい現場対応ができていれば、防ぐことができたのではないかと思います。倒れてからの処置が適切であれば助かった命ではないのか、それは、いまもずっと思います。

今後皆さんは、大切な人の命を預かることになると思います。これから色んな知識を身に付けて、『事故は未然に防ぐ』という気持ちで接して頂ければ有り難いと思います。」

## 参加者の感想

- ・今まで当たり前に行っていたシャトルランで人が亡くなってしまうことがあるのだと考えさせられました。県や学校側の対応は本当にひどいものだと思います。法的責任がなくても、学校の管理下で起きたことなのだからしっかり説明し、責任をとるべきだと思います。蘇生法を知らない人が体育教員になってはいけないと思うし、自分たちは絶対にそのようになってはいけないと思いました。
- ・将来教師を目指す身として、とても先生方の対応に腹が立ちました。命を失うことの重大さをまるで分かっていない様子にとっても憤りを感じました。生命を救う夢を持った人が亡くなってしまったこと、とても残念に思います。私も将来子どもの命を預かる職に就く予定です。凜太郎君のようなことを未然に防ぐことが出来るよう、教師としてしっかりした状況判断と適した行動ができるように学んでいきます。本日は本当にありがとうございました。
- ・すごく想いが伝わってきました。私にも3つ上の姉がいてとても仲が良いです。もしある日突然姉が亡くなってしまったらと思うと恐くて仕方ないです。心停止はいつ起こるか分からないので、自分の命、周りの人の命を大切にしていきたいと思いました。そして見て見ぬふりや見逃してしまうということは絶対にしてはいけないと思いました。

- ・今まで事故から学ぶ研修会を聞いてきましたが、一番学校側の対応がひどいと感じました。そのような学校が存在していると思うと、心が痛いというよりも怒りを覚えるくらいです。私は、そのような学校を無くしていきたいと、強く思いました。

教員が対処方法を理解し、行動していたのなら、助かった命であることは間違いないことで、逆に教員が知らなければ助からない。私たちが今すべきことは、学校で事故を起こさないこと、起こった時の対処方法、事故が起きてからどういった態度で真実を明らかにしていくかであると思います。

- ・学校対応のひどさに驚きました。私自身も夏に、身内の不幸がありました。初めて身内が亡くなり、普段、当たり前のようにいた存在が突然無くなり、今でも全く信じられず、また会えると思ってしまいます。本当に明日がくるということは当たり前ではなく、いつ、誰に何が起こるのか、分かりません。学校側の対応をはじめ、事実を明らかにすることが、遺族の方々の少しでも次に進める一歩だと思います。柚野さんご夫婦の話を聞き、自分も、涙が止まりませんでした。日々過ごせていることに感謝を忘れず、事故を未然に防げる環境を広めていきたいです。

- ・2001年生まれ、私と年齢が近く、心が痛みました。シャトルラン中の死亡、人工呼吸に対して「抵抗があった」という言葉。正直あり得ないと思いました。学校の対応に対して強い憤りを感じます。私は来年から、公立の学校の養護教諭となりますが、学校の安全管理、命の重みの捉え方を今一度考え直そうと思いました。さらにその後の学校の在り方、遺族への対応。一人の命を軽くみたことはありませんでしたが、大切な人の命と考えると、まだまだ考えが浅いので、これからもたくさん勉強しようと思います。

- ・今回のお話にあった妹さんの言葉に、自分も救命の大切さについて改めて気づかされました。自分が行っている武道の本質は相手を倒すことではなく、相手と戦う前に戦意を喪失させること。それと同じように救命の本質は、事故が起きてからでなく起こる前に未然に防ぐことだと思いました。今回学んだことを将来に生かし、二度と同じようなことが起きないように予防し、そして万が一起きてしまったら、すぐに正しい対応が出来るようになることが今回学んだことであり、自分たちの義務だと思いました。

## 救急救命講習会（心肺蘇生）

昨年度に引き続き、一般社団法人ファストエイドの心肺蘇生訓練をペットボトルの空き容器で簡単に実施できるキット『CPR TRAINING BOTTLE』を用いた心肺蘇生法講習会を行った。



## 参加者の感想

- ・自分も赤十字救急法救急員の資格を取ってから常に意識しているが、実際に現場にあたったらテンパってしまうと思うので、今日みたいな復習できる機会があってよかったと思う。こういった機会が増えて、もっと助かる人が増えればいいなと思った。



- ・ あいまいに覚えていた心肺蘇生法を改めて学び直すことができた。強く・早く・絶え間なくを徹底して、迷ったら胸骨圧迫をしていくよう心がけていきます。自分ができるのはもちろん、人に教えることもできるようにしていきます。
- ・ 実際にペットボトルで胸骨圧迫の練習をしてみて、意外と強く押すことが大切だと感じた。速さも重要視されることに気づいた。倒れている人がいたら、迷わずに胸骨圧迫として人助けができるようになりたいと思った。呼吸の確認をし、しっかりと記録することを忘れずに実践できるようにしたいと思った。教員は生徒を守れるように知識を持つことが必要だと感じた。
- ・ 音楽に合わせて2分間やるだけでもこんなに体中が熱くなり汗をかくとは思わなかった。これをやるだけで救命率が二倍になると聞いて驚かされ、同時に重要性を感じた。今回実習で音楽を流して少し明るくやっていたが、実際の現場だとパニックになりうまくできないのではと不安を感じたので、小中高でもこういった実習を増やしていくべきだと思った。
- ・ 自分が高校で電車通学をしている時、朝の電車で隣の車両で心停止になった男性がいて、近くの男性たちが救命活動を素早くしていました。そんな風に自分たちも素早くできるように練習を重ねて、いざという時に手を伸ばして目の前の命をつなぎ止められるようにしたいです。
- ・ 胸骨圧迫を行うとき、一人だけではなく多くの人が必要であり、一人一人に救急救命の知識が必要だと思った。自分自身が指導者になった際に今回の研修会で聞いたような事態を起こさないよう、冷静な判断で救命救急を行えるようになっておきたい。
- ・ 人の命を必ず助けるため、自分が出来ることはたくさんあることを知った。小5の子でも人の命を救うことができたのだから、誰でもできる。勇気さえあれば。私自身、これから毎日を大切に生きようと思う。
- ・ 1人で胸骨圧迫をするのは非常に疲れたため、とにかく人をたくさん呼ぶことが大切だと分かった。倒れた人がいると、人だかりができるだけで倒れた人がそのままということをよく聞くので、そうならな

いようすぐに行動すべきだと思った。やるとやらないのでは予後が大きく変わると聞き、強く、やろうと思った。骨が刺さることが恐かったけど、今まででゼロだったと聞いて、安心しました！

- 1) 市民救助者は、成人の要救助者に対しては、胸骨圧迫に人工呼吸を加えて「30回：2回」の割合で行うとされているが、小児・乳児の場合には「15回：2回」という比率が推奨されている。子どもは大人に較べて、酸素の消費量が多いことから、子どもには酸素の供給量を上げることが望ましいためである。ただし1名の救助者によってこの比率で実施された場合、胸骨圧迫の中断時間が多いため、累積で考えると、圧迫によって生まれる血流量が少なくなってしまう。そのため同比率によるCPRは、救助者二人で圧迫と換気を分担した場合に限り、血液の酸素化と組織への酸素化が有効に行えるため、望ましいものとされている。
- 2) JRC ガイドライン2015によれば、人工呼吸は訓練を受けていない市民救助者は行わなくてよいとされているが、本件で体育教師は市民救助者とは異なること、小児の心停止、窒息、溺水、気道閉塞、目撃がない心停止などの場合は、人工呼吸を組み合わせた心肺蘇生を実施することが望ましいとされていることなどから鑑み、本件では人工呼吸を実施することが望ましかったのではないかと考えられる。

(報告：南部さおり)